

[IV]-6 5% CO₂+95% O₂ 混合ガス常圧下吸入時の放射線治療の臨床経験

渡辺哲敏・真理 勲 (東京大学医学部放射線医学教室:主任 宮川 正教授)

I. 緒言

酸素の放射線効果増強作用は現在臨床面で所謂 "Hyperbaric Oxygen Therapy" として応用される。特に Gray^①, Conger, Sanger, Thomlinson^② の生物学的基礎研究者と協同して Churchill-Davidson^③ (St. Thomas's Hospital, London.) は 240 例以上の臨床経験あり、頭頸部腫瘍の治療において、通常大気下照射よりもより小さな飛沫を報告している。その他 Van den Brek^④ (The Peter MacCallum Clinic, Melbourne.) の報告もみられる。併しこれらは Hyperbaric Oxygen Therapy は必ずも 100% Oxygen の 3~4 気圧下の高压照射法で、既によく知られてる数々の副作用と、臨床応用上の障壁をもつてゐる。すなばく純酸素高压下における火災・爆発・の危険性、昇降圧時の chamber 内の温度変化、耳管内外圧の相違による不快な耳鳴、鼓膜破裂の可能性、酸素中毒、などに加之て昇圧 10~20 分、加圧下保持 30 分、照射時間、降圧 4~5 分合計にて一人の治療に約 60 分を必要とする実力があり Oxygen chamber の高価なども考へなければ、仲々 Routine レベルの普及が困難と云ふ。そこでこれらにくらべて ①簡単で ②安全、③廉価で ④結果の大差のない方法として 5% CO₂+95% O₂ 混合ガスの使用可能か検討され動物腫瘍に対する効果よりその代用の可能性が推論されてゐるので今回その臨床応用を試みたので報告する。

II. 症例

症例
上頸腫瘍 新鮮例 6 例

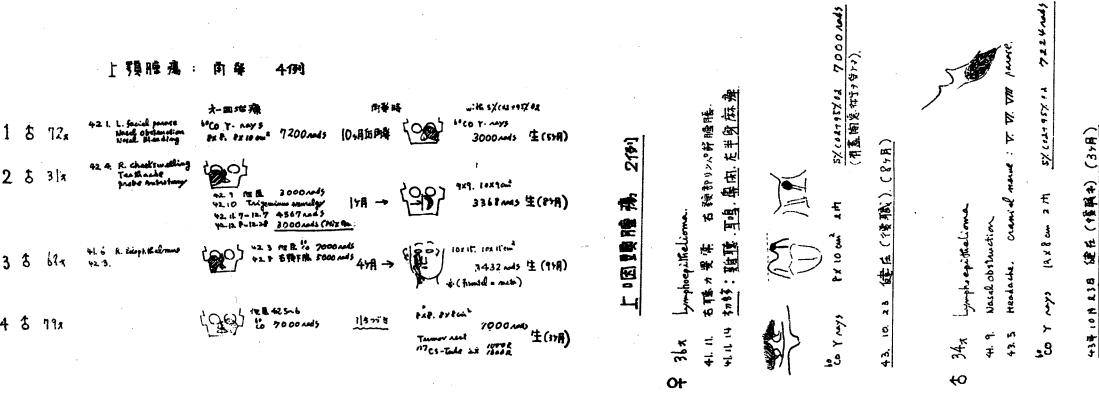
| 性別 年令 | 現病歴 | 初診時所見 | 治療 | 結果 |
|--------|-----------------------------------|-------|--|--------|
| 1 ♂ 72 | SL & R cheek swelling and pain | (図 1) | WT 5% CO ₂ +95% O ₂ 4.5 atm. 7000 rads 42.0~42.5 RT | 生 (PR) |
| 2 ♀ 53 | SL & R cheek swelling and pain | (図 2) | WT 5% CO ₂ +95% O ₂ 4.5 atm. 3850 rads 3210 rads | 生 (PR) |
| 3 ♀ 51 | SL & R mandibular swelling | (図 3) | WT 5% CO ₂ +95% O ₂ 4.5 atm. 3350 rads 3610 rads | 死 (PD) |
| 4 ♀ 60 | SL & R cheek swelling and pain | (図 4) | WT 5% CO ₂ +95% O ₂ 4.5 atm. 1600 rads 2110 rads 5460 rads | 死 (PD) |
| 5 ♂ 64 | SL & R mandibular swelling | (図 5) | WT 5% CO ₂ +95% O ₂ 4.5 atm. 2930 rads 4410 rads | 生 (PR) |
| 6 ♂ 41 | SL & R cheek swelling and pain | (図 6) | WT 5% CO ₂ +95% O ₂ 4.5 atm. 3210 rads | 生 (PR) |

新鮮上頸腫瘍 6 例、両側各 3 例、上頸腫瘍 2 例 合計 12 例について試行した。これらも広範囲腫瘍の症例である。

治療の詳細、腫瘍進展度、転移の図 1 ～ 6 に示す。

上頸例中の新鮮 6 例は治療終了後 5 ヶ月以上全身転移を呈し死亡した一例を除き、他の 5 例も治療後 7 ヶ月～ 11 ヶ月の現在において健在である。

両側例、上頸腫瘍例の 6 例はいずれも生存中である。一人の死亡をみていない。両側例に対する試みは完全に癌例とみなす。前回照射線量、理治療までの期間、初回治療の内容(手術か、放射線か) 併せから、二例を分析することは極めて興味深い問題であるが、現在までの我々の施設では 4 例に亘り生存率は 100% である。上頸腫瘍の 2 例は共に神経侵犯を伴う進行例であり、何より今日旧職に復帰して 30.



II 考察

混合ガスの吸入は簡単な麻酔筒又スクエアを使用した。照射はガス吸入開始の直後から開始して“3rd Hyperbaric Oxygen Therapy”とすべき非常に簡易な方法である。

照射線量(1回量、總線量)は肉腫では5日“1.5”多くの困難な問題を含んでいる。我々は我々が600R或3/wk (Churchill-Davidson) の方法を採用したがこれを(600R×6回=3600R)、この差を“2”は J. A. Fowler^①の “Dose of transient region”を考へた “Single exposure vs fractionation” と名づけられ、現在何Sのdataがある。H. Sault^②は3分割と330.0.e.r.の低下、du Sault^③は400R 1回、9分割の0.e.r.の高さと小細胞肺癌に対する興味のある所である。本症例の照射の副作用を報告せざるを得ない。

IV 結論：100% Oxygen, 3~4気圧下照射法は代替的であり 5%(O₂+95%O₂) 常圧下照射法を12例より多く越す、その有用性について報告した。

文献

- 1) Gray, L.H., Conger, A.D., Ebert, M., Hornsey, S., and A Scott.: Brit.J.Radiol. 26, 1953.
- 2) Thomlinson, R.H.: In Brookhaven Symposium in Biology. 1961. 3) Churchill-Davidson: Cancer Progress. 164(1960): Cancer. 122(1961): Proc.Royal.Soc.Med. 57 (1964): Lancet. 1(1955): Brit.J.Radiol. 30(1967). 4) Van den Brenk et al: Clinical application of Hyperbaric Oxygen. 144, Amsterdam(1964), 5) du Sault: Brit.J.Radiol. 37, 129(1968).
- 6) Watanabe and Thomlinson: Nippon Acta Radiol. 10, 1959.

